

受け継がれる心

THE HAND MADE

井坪工務店

Since 1965

伊那谷 CRAFTSMAN

伝え続ける技

変わらないことの安心

家を建てる時に見えてくることがある。

世の中、変化することばかりに気を取られていないだろうか。

人は、たくさんの変えたくないこと、

変えるべきでないことと共に生きている。

たくさんの変わらないものを通じて、

人はふるさとや誰かとつながっているから。

そして人は、大切なものとつながり続ける安心のために、

変えたくない毎日を心を込めて生きている。

井坪工務店はそんな人たちを守り続ける。

No 18

Original Report

Builder /

井坪工務店

Note /

南信地区 T邸
家族構成 2人

務 HAND MADE MU

和の家には和の家に相応しい所作がある。たとえば、玄関でお客様を迎えるとき、見送るときは、相手と目線を合わせるように、自然と正座する。急須を手にすれば、反対の手がそっとその蓋に添えられる。日本家屋に暮らす人のそんな仕草を美しいと思う。



これまでの暮らしが
これからもなるべく
変わらないように

堂々たる構えの大屋根に、黒の外壁が軒の柱や軒天の木の美しさを際立たせています。この家には、本格和風の家が備える静かで穏やかな風格であり、ふるさとへ帰って来たときに感じる安心です。

T夫妻はこの家を作る前、ここからほど近い場所で暮らしていました。先祖伝来の土地に親世代がつくった家を、Tさんの代になって建て替えたのが11年前のことです。そのとき、家を作るなら井坪工務店がいいと勧めてくれたのは、当時一緒に暮らしていて、同社が手がけた家の見学会に参加した息子さんや娘さんでした。

そうして建てた家は、実際に住み心地が良かったそうです。でも、心も体もすっかり馴染んだ折しも折、リニア中央新幹線の工事の話が持ち上がり、Tさんの家も移転対象となります。

移転地はすぐ近くに見つかり

ました。とはいえ、長らく親しんだ土地ばかりか、愛着を感じ始めた家と別れるのは、辛いものがありました。そこで、もう一度井坪工務店に家づくりを頼みました。自分たちの紡いできた暮らしが、これからもなるべく変わらないものになるように。

あれから子どもたちはそれぞれ結婚して家を出ていったこともあり、また自分たちがこれから年を重ねることを思えば、2階建てにする必要はありません。今度の家は平屋です。その代わり、家を作る向き、そして1階部分の間取りは10年間馴染んだ家とほぼ一緒になりました。変わったのは、パントリーや車庫の位置と玄関の幅くらいです。

「家の中にいれば、目をつぶってでも歩けます」とご主人が言えば、「食器棚も含め台所の使い勝手は前の家とまったく同じです。新しい家だから、油を使う料理を遠慮するくらい」と奥様は笑顔で答えてくれました。

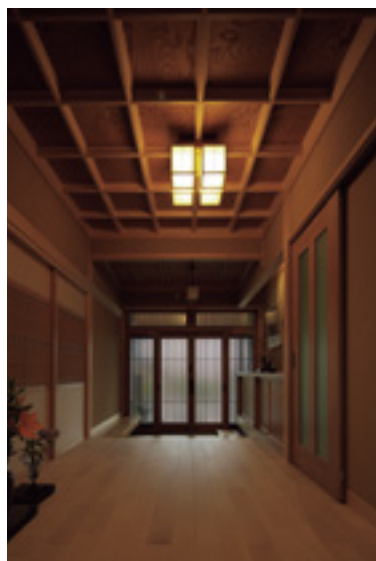
新しい家を作るなら、やってみることがあれこれ生まれそうなもの。でも、夫妻が選んだのは、「変わらないこと、変えないこと」でした。



体に刻まれた一日のリズムを
愛おしむように。大切な人の
笑顔を思い浮かべながら

玄関のある東側に大きな軒をかけた。柱はヒノギ、梁や天井はヒバである。これほど緻密な材を調達できる工務店は少ない。
玄関は和の美の粋を集めた空間だ。建具の一部に旧宅のものを再利用した。新旧の材はやがて色が馴染み、思い出も一つになる。

その幅こそ少し違ったとはいえ、玄関のこしらえ方は前と一緒にです。たたきから式台、上がり框を経て通りの間へと至る静粛な水平ライン。その奥に、この家を心棒のように貫く大黒柱。見上げると格天井や竿縁天井が折り目正しい幾何学模様をなしています。玄関は和の家の象徴であり、T家の象徴なのです。
ちなみに玄関を入って右手の建具は、前の家で使っていたものです。また、造作の都合により本来の役割では再利用できなかった大黒柱は、テーブルにつくりかえて座敷に据えました。
農作業に勤しむのもこれまでと一緒。ご主人は30アールの畑と6アールの田んぼをつくっています。いずれも自家用で、収穫した野菜や果樹、お米はこの





家の前に畑と田んぼが広がり、そこで丹精込めた作物を子や孫が喜んで食べてくれる——。その光景は、前の家のときも今も変わらない。庭木も氏神様を祀る祠もこの家にそのまま移した。移転後も変わらぬ日々の喜びが、今もなお続いている。



井坪工務店

創業昭和40年 信州伊那谷クラフトマンの建てる家

〒395-0004 長野県飯田市上郷黒田693 TEL.0265-22-5262 (代) FAX.0265-22-5254



家でいただくほか、子どもたちや親戚に送ってあげます。丹精込めた作物を子や孫たちに食べてもらえるのがうれしいのです。だから、移転先を決めるときは、家のすぐ隣で農業ができる土地を選びました。これまでの暮らしで体に刻み込まれた一日のリズムを愛おしむように、食べてくれる人の変わらぬ笑顔を思い浮かべながら、ご主人は土と親しみます。

家の裏手には、家族が「長屋」と呼ぶ建物があります。収穫した野菜を保存したり、特産の干

し柿をつくったりするために、前の家にあった土蔵の代わりに建てました。一日の、一年の農作業に関わる、ずっとたどってきた動線の中に、今度はこの長屋を組み入れたのです。

庭木もすべて移植しました。長年一緒に暮らしてきた木たちだからです。大きな木や根付きにくい木は造園屋さんに任せたいものの、それ以外は自分で車に積んで運び、植え直しました。そんな庭の一角に小さな祠がありました。家の氏神様を分社したもので、移転前から代々家

族によって祀られてきたそうです。家族が地域とつながる証である神様は、新しい家でもこうして一家を見守っているのです。

変わらないことの多いこの家で、意識して変えたことのひとつが太陽光発電パネルの搭載でした。その理由は、井戸を掘って水道以外の飲み水を確保したのと同様に、主に災害時への備えを目的としたものです。また、室内では将来的な車いすでの移動も見越し、廊下の幅やトイレの空間を十分に広く確保しました。これらはすべて、将来への

安心に備えるためです。

変えたくないこと、変えるべきでないこと、一方で場合によって変えていくこと、それは全部「安心」につながっていました。家族にとっけかけがえのないこのふるさとで、この先ずっと長く暮らすための安心です。

やはりこの家は、住む人の人生を守り続けることを本務とし、時を経るにつれて熟成していく価値を届けられる井坪工務店だからこそ実現できた家でした。

